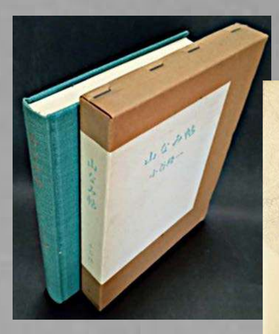
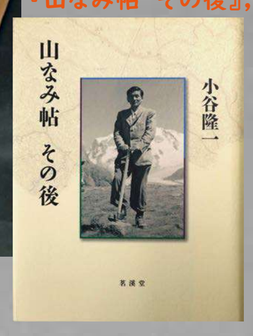
山岳科学研究と「小谷コレクション」

信州大学大学史資料センター　田中圭美

小谷隆一（こたに　りゅういち）（1924−2006）





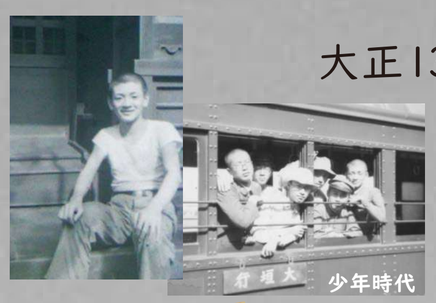
小谷隆一著書
『山なみ帖』，茗渓堂，1981.※1
『山なみ帖　その後』，茗渓堂，2008.※2

小谷が使用したカメラのひとつ（ライカ M3）

（掲載しているスナップ写真は、小谷のアルバムから）

はじめに

小谷隆一は、生涯を通して蒐集した国内外の貴重な山岳図書「小谷コレクション」を信州大学に寄贈しました。近年は登山ブームの再来で、知識や経験の少なさから、山での事故が後を絶ちません。今、山とは登山とは何かを考えた時、コレクションはその一助となります。さらには、山岳科学研究や教育に利活用されることを期待します。この研究は、山と山書を愛し、山の魅力を伝えた小谷隆一という人物にアプローチし、その重要な資源を再認識するものです。



少年時代

大正13年、京都市内に江戸時代創業の老舗紙問屋「伊勢藤商店」（現：株式会社イセトー）の長男として生まれる。

−山を登る−

野球好きだった少年は、小学校4年のときに従兄につれられてスキーを始め、京都市西方の愛宕（あたご）山スキー場に何度も通った。「私とスポーツ」※2

京都第二商業学校で山の恩師となる森本次男（もりもと つぐお）と出会い山岳部に入ると、そこから山登りに熱中していく。京都北山や奥美濃、白山麓を登り、登山の楽しみを知り始めていった。「京都北山」※1、「石徹白（いとしろ）懐古」※2

『山脈帖』
松高卒業というとき、小谷が恩師や友人から別れを惜しむ言葉を記してもらったノート。望月市恵、辻邦生、北杜夫　他

山に近いという理由で旧制松本高等学校（信州大学の前身校のひとつ）に入学し山岳部に所属。入部歓迎コンパで奥穂高に行ったときには、初めて見る日本アルプスの雄大さに感激した。小谷にとって、松本にはほのかに甘い青春の思い出がある。それは、美ヶ原に友人2人と向かう途中で偶然出会った女学生との登山であった。「晩秋の美ケ原」※1、「『晩秋の美ケ原』とその後」※2

戦争末期で思うような登山は叶わなかったが、教師や友と過ごした時間は生涯の宝物となり、卒業時の寄せ書き『山脈帖』は一生の生きる支えとなった。

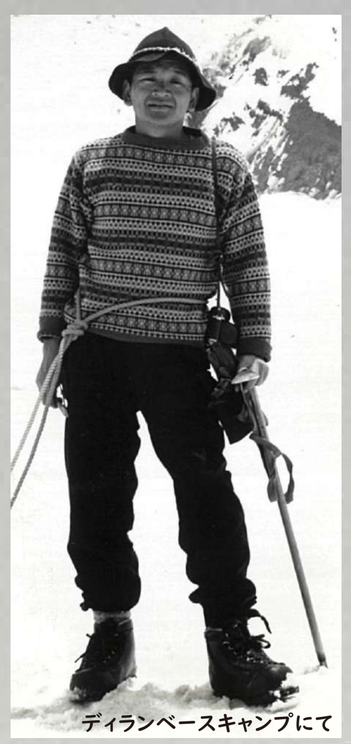
松本高等学校時代

思誠寮の友と

王ヶ頭頂上にて信濃乙女と

東京大学スキー山岳部では、赤石岳冬季合宿でサブリーダーを務めるが遭難事故で仲間1人を失い、自身も遭難しかけ、山の怖さを知る。「冬山の帰途」※1

学生時代に知り合った松下貞子さんと結婚。（26歳）一緒に登山やスキーに行った。



ディランベースキャンプにて

家業を継ぐために京都へ戻った小谷は、京都府山岳連盟に所属し、海外遠征登山に挑む。1965（昭和40）年、小谷40歳にして京都府山岳連盟カラコルム・ヒマラヤ登山隊の隊長としてディラン（7,273m）初登頂に挑むが、悪天候に阻まれ山頂を目前にして断念する。「ディラン峰」※1

小谷は、遠征隊メンバーに松高後輩だった斎藤宗吉（北杜夫（きたもりお））をドクターとして引き入れた。「北杜夫君とカラコルム」※1

北はこの遠征をもとに『白きたおやかな峰』を書き下ろし、小谷を小滝隊長として描いている。「『白きたおやかな峰』私感」※1

その後も、中国コングール（7,717m）に3度挑み、1989（平成元）年、登攀隊員9名全員が北稜ルートを初登攀し、第一報を受けたときには感激の涙を流した。

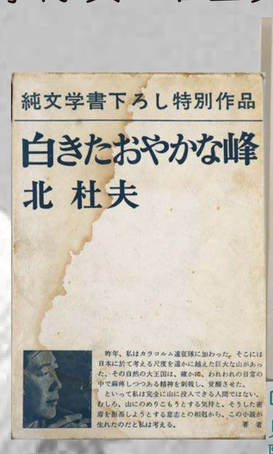
〜小谷とお茶〜

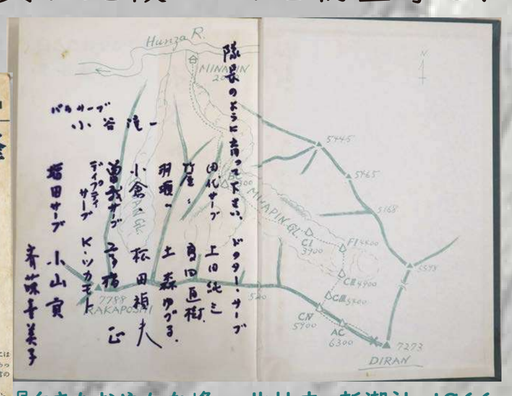
小谷の海外遠征にはお茶が登場する。
親友の千宗室（後の裏千家第15代家元千玄室）から贈られた茶道具を衣類に包んで大切に持って登り、自ら隊員たちにお茶を点ててふるまった。
その一服は、小谷や隊員たちの心を癒す役割を果たしたのである。
ディランに登攀を開始する日には、隊員たちのはやる心を落ち着かせ、灼熱の山肌を登り切った後には爽快な活力を与え、悪天候に阻まれ連絡が途絶えた隊員の生還を祈りながら−。
「ヒマラヤとお茶」※1、「ヒマラヤでふたたびお茶を」※2

お茶を点てる小谷

お茶を頂く北杜夫

隊員たちと一服

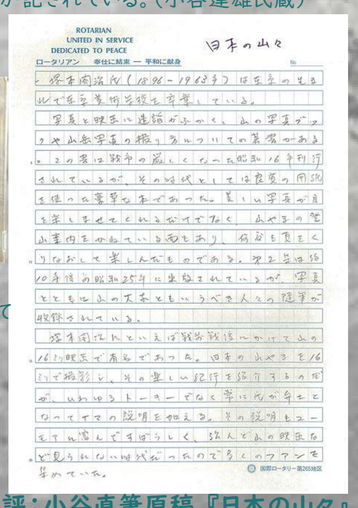




『白きたおやかな峰』，北杜夫，新潮社，1966.
見返しには、ディラン峰へのルートマップのイラストが描かれ、隊員らの直筆サインが記されている。（小谷達雄氏蔵）

−山を読む−

山の文学者としても高名だった森本先生の影響を受け、山の書物に興味を持つようになり、中学生のころから集めはじめた山の本は、大学を卒業するころには1,000冊くらいになっていた。
その後も山の本を愛し、写真集『日本の山々』（塚本閤治（つかもと こうじ）著）などを入手し、大切に保存していった。
仕事でヨーロッパを訪れた際には古書店に通い、欠けている古書や新刊書を購入しコレクションを充実して行く。
1974（昭和49）年に、山の書物の研究では第一人者であった小林義正（こばやしよしまさ）氏の5,000冊を超える「高嶺文庫（たかねぶんこ）」を偶然にも譲り受けることになる。「山の書物の楽しみ」※2
『山の言葉』（森本次男著）に記された「山は足のためのものばかりではない。」という教えから、「書物から多くの知識を得て山登りすること」、そこに優れた登山家への道があると小谷は考えていた。「山岳名著顛末記」※2



書評：小谷直筆原稿『日本の山々』

1988(昭和62)年、京都丸善にて「山岳名著100選展 ―小谷コレクションより―」を開催する。このとき、自身で展示図書の全書評を書く。

左から
『山の言葉』，森本次男，明文堂，1942.
『秋山紀行』上・下，鈴木牧之，1829.
『A HISTORY of MOUNTAINS, Geographical and Mineralogical,』，Joseph Wilson Nicol.Pall Mall,London 1807-1810.

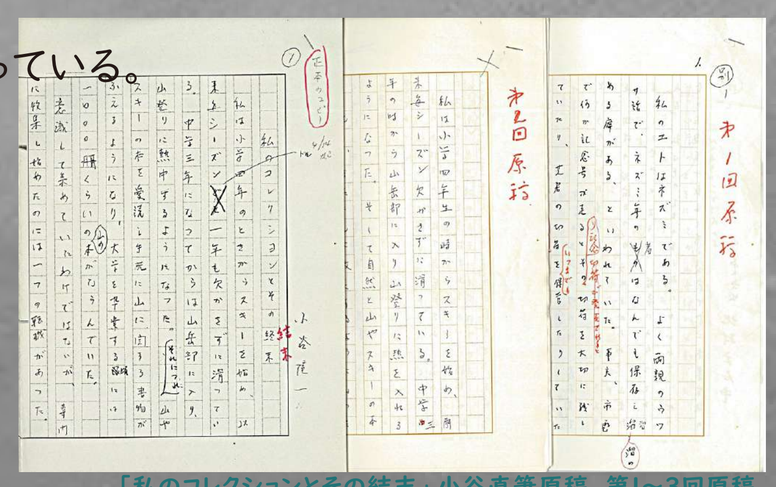
自宅の書庫にて

1987（昭和62）年に梅棹忠夫（うめさお ただお）（国立民族学博物館長）と山岳書について対談をする。「山を読んでたのしむ−梅棹忠夫氏との対談−」※2

「山岳科学フォーラム」（信州大学開催 2001. 10）の特別講演で、梅棹忠夫が山岳書の拠点を信州大学に作ることを提案し、小谷を紹介した。

−山を慈しむ−

自慢のコレクションへの愛情と、それを手放すまでの葛藤が書かれた原稿が残っている。
そこには、松本高等学校で過ごした日々への想いが切々と語られ、ついには母校を継ぐ信州大学へ寄贈することを決心したことが記されている。
「山の書物の楽しみ−小谷コレクションの展開と結末−」※2



「私のコレクションとその結末」小谷直筆原稿　第1〜3回原稿

こうして、小谷は、2003年3月、約8,000点におよぶ国内外有数の貴重な山岳図書を信州大学に寄贈した。この「小谷コレクション」は、信州大学松本キャンパスの中央図書館で誰でも閲覧することが出来る。

「小谷コレクション」Webサイト

2006（平成18）年　永眠。享年81歳。

貞子さん（2024年10月）

おわりに

『山脈帖』をはじめ、小谷の少年時代からの数々の写真や原稿は、妻である貞子氏が大切に保管されてきたものです。それらの資料を長男の達雄氏のご協力のもと、借用、調査し企画展「小谷隆一生誕百年回顧展−山を登り、山を読み、山を慈しむ−」を開催することが出来ました。ここに厚く御礼申し上げます。

Web展覧会　研究報告